シーワールドのアニマル達

●アメンボ

水面を自由自在に動きまわるアメンボは、日本全国の池や水田、川などに生息し、時には雨あがりにできた水たまりでも見つけることができる、身近な水生昆虫です。当館では、アメンボとオオアメンボの２種類を展示していますが、この小さな生きものを飼うためには、いくつかの気をつけなければならないことがあります。採集したアメンボを、輸送用の容器に入れる時には、水は禁物です。輸送中の振動で水面がゆれ、アメンボが水をかぶるとおぼれてしまうことがあるからです。水面に浮いて生活をするアメンボは、水に弱いのです。水槽の水面には、常にゆるやかな流れができるようにし、ホコリがたまらない工夫をしています。水面をアイススケーターのようにすべって移動するアメンボにとって、ホコリは大敵です。ホコリは長い６本の足にからみつき、自由に動きまわれなくなるからです。また、アメンボはハネを広げて飛ぶこともできます。水槽でも生活環境が気に入らなければ、どこかへ飛んでいってしまいます。自然環境を再現した水槽には、これを防ぐためのフタやネットがないので、餌を十分に与え、気温の低い時には周囲を暖めるなどして、アメンボが好む生活環境を整えることが大切です。そのかいあってか、今では水槽内で繁殖した、子アメンボが見られるようになりました。

（堀井健）

▲アメンボ　*Aquarius paludum*（左）
オオアメンボ　*Aquarius elongatus*（右）

●ウミウシの仲間

ウミウシは「まき貝」の仲間ですが、貝殻をもたず、貝とは全く異る形をしています。世界中に広く分布し、種類も多く、形も変化に富んでいます。鴨川周辺の磯には、22種が見られますが、いずれも体長２～５cmの小型の種類です。体色が目立つ色彩をしているため、比較的簡単に見つけることができますが、その生活については不明な点が多い生物です。肉食性で特定の餌しか食べない種類が多いので、種類に適した餌料を見つけることが、飼育を続けるのには最も大切なことなのです。そのため、採集時には周囲の生物相の調査も忘れてはならない作業となります。

（大澤）

▲ミヤコウミウシ　*Dendrodoris denisoni*

▲ムカデミノウミウシ　*Pteraeolidia ianthina*

▲ニシキウミウシ　*Ceratosoma trilobatum*

さかまた　No.50　（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464－18

☎(0470)92－2121

発行日　平成９年12月

さかまた

鴨川シーワールド　NO.50

鰭脚類の子どもたち

▲セイウチファミリー　全員集合!!

水族館で飼育されている生きものというとみなさんは何を思いうかべますか？「魚」ですか、それとも「イルカ」でしょうか？魚やイルカは水の中だけで生活しているため、水族館で飼育されるにふさわしい生きものですが、イルカと同じほ乳類の仲間で、陸上と水中の両方で生活をしている「鰭脚類（ききゃくるい）」も水族館で飼育されている人気者のひとつです。鰭脚類とは「鰭（ひれ）」のような「脚（あし）」をもち、水中を自由自在に泳ぎまわり、休息や子育ては陸上で行うアシカやトド、アザラシ、セイウチの仲間を呼ぶ総称です。毎年春から夏にかけて、鰭脚類の赤ちゃんが生まれる季節がやってきますが、今年は、ゼニガタアザラシ、セイウチ、カリフォルニアアシカ、トドと例年にないベビーラッシュとなりました。今回は鴨川シーワールドの鰭脚類の繁殖についてご紹介します。

「リック」の子ども達

現在アザラシプールには6頭のゴマフアザラシがいますが、そのうち5頭はシーワールド生まれで、残りの1頭は1976年よりこれまでに10頭の子どもを育てた、お母さんアザラシの「リック」です。一昨年には、無事、雌の「クリート」を出産した「リック」は、当館のアザラシファミリーの頂点に立ち、孫と子どもに囲まれて元気に暮らしています。

▲ゴマフアザラシのリックと9番目の子ども、リューク

アシカショーの看板スター「ハック」

カリフォルニアアシカの繁殖は1981年に初めて成功し、その後はほぼ毎年子どもが生まれ、今年生まれた「トゥウィル」の子どもがちょうど30頭目になります。1981年に生まれた2頭のうちの1頭が「ハック」で、ショーのタイトルに名前が使われるほど、今ではすっかり有名人（？）となりました。現在アシカショーで活躍している個体のほとんどが、シーワールドで生まれた子ども達で、スター予備軍も「ハック」に続けとがんばっています。

▲カリフォルニアアシカのハックと母親のサンタ

世界で初めて生まれた「サンディー」

1976年に南オーストラリア州政府より寄贈されたオーストラリアアシカが、1981年に世界で初めて飼育下で出産をしました。この時生まれた雄の子どもは「サンディー」と名付けられ、今では、体長190cm、体重170kgとなり、堂々とした体格と、せいかんな顔立ちの立派な大人に育ちました。その後「サンディー」には、弟と妹が1頭ずつ生まれましたが、母親は雌の子どもを育てている時に、急に体調をくずし死亡してしまいました。その時の子どもの「アリス」はまだ、生後1ヶ月目でお乳を飲んでいたので、その後は係員が母親がわりとなり、ミルクを与えて育てました。その「アリス」も今では年令9才となり、母親ゆずりの、のんびりとした性格をみせながら、アシカプールで日なたぼっこをする姿が見られます。

▲世界初、飼育下でのオーストラリアアシカの繁殖（サンディーと母親のグランビィ）

セイウチの「チャッキー」に弟誕生

セイウチプールでは、大中小、4頭のセイウチが仲よく暮らしています。1994年に日本で初めて生まれた雄の「チャッキー」に続き、今年の5月27日に、2頭目の雄の赤ちゃんが生まれたので、セイウチの家族は父親と母親、それに兄弟の4頭になったのです。そのためにセイウチプールは、いささか手狭になりましたが、来年には、新居も完成する予定ですので、シーワールドのセイウチファミリーがますます増えることを期待しています。

シーワールド初のトドの赤ちゃん

1970年からシーワールドではトドを飼育してきましたが、今までトドの繁殖は成功しませんでした。しかし、今年の6月9日に待望の雌の赤ちゃんが誕生したのです。母親の「ルイ」は「ノサ」のお嫁さん候補として2年前に北海道の小樽水族館からやってきましたが、昨年、交尾が確認され、出産1ヶ月程前よりおなかのふくらみが目立ちはじめました。「ルイ」は初産でもあったこともあり、心配をしていましたが、無事出産し、子育ても順調に行ってくれ、子どもも元気に育っています。子どものトドは、まだ名前がついていませんが、今ではトドプールで、岩の上によじ登って遊んだりして、おてんばぶりを発揮しています。

▲シーワールド初のトドの赤ちゃん、親子で記念撮影

長いシーワールドの歴史の中で、今までにたくさんの鰭脚類の子ども達が生まれ育ってきました。飼育係の動物を飼育する上での大きな目標のひとつは繁殖を成功させることです。そのため、子どもが無事生まれ、育つことは、この上ない喜びなのです。自然界で数が少なくなってしまった貴重な動物達を飼育下において繁殖させることは、水族館の使命でもあるので、これからも日々の努力をしていくつもりです。

関

トピックス

岩のぼりの達人 タカアシガニ

沖合の深みにいる生きものを展示している水槽の中で、最もお客様の目をひく生物がタカアシガニです。

タカアシガニは、世界最大のカニとしてよく知られていますが、その生活については謎につつまれています。水深100～400mの泥の海底に生息するといわれているため、これまでタカアシガニの展示水槽には、歩行の妨げとなる岩などの造形を置くことはありませんでした。しかし、試みに、岩の多い水槽で展示をしてみたところ、意外な行動を観察することができました。

大きな体に似あわず、8本の歩脚（ほきゃく）を器用に動かし、垂直な岩壁を登り、岩のすき間に歩脚の先端をかけ、長時間じっとしていたり、降りる時には、ゆっくりと慎重に移動しますが、時には歩脚を1本ずつ岩から離し、バランスをとりながら、フワリと水底に着地することも見られました。まるでベテランのロッククライマーのようなこの動きは、今までに飼育したことがあるどの水槽よりも、生き生きとした自然の姿が見られ、海での未だ知られていない生活を、かいま見るような気がしました。

▲垂直な岩壁で器用にバランスをとります。

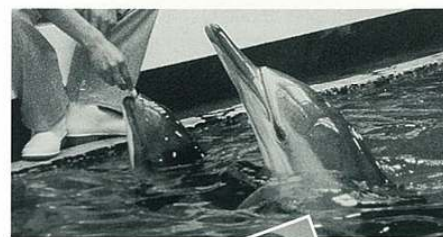
また、これまでは、ひとつの水槽で飼育できる個体数は、個体の大きさと水槽の底面積によって決まるため、複数個体の展示には、底面積の広い大きな水槽が必要と考えられていましたが、この度の試みから、水槽内の岩組を工夫することにより底面積の狭い水槽でも多くの個体を展示することができることもわかりました。

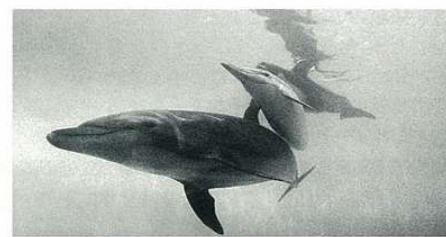
今後も、行動観察に努めて、タカアシガニの新たな生活の一面を見つけていきたいと思っています。

森

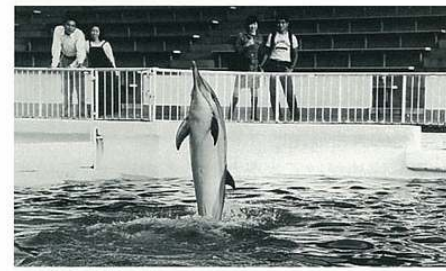
▲岩にへばりつく姿に、お客様もびっくり!!

どこでもアイドル idol マイルカの1年

▲イルカショーにて

▲マリンシアターで

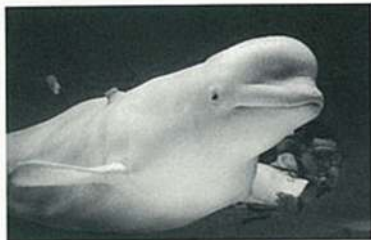
▲はい！握手

▲バンドウイルカと共泳中

▲こんな遊びも覚えました。

▲カマイルカと並んでハイ ポーズ

南の海に生活するマイルカがシーワールドにやって来て一年がたちました。暖かい房総とはいえ冬はマイルカには少々寒いので、屋内のマリンシアターで飼育されていましたが、今年の夏にはゲストメンバーとしてイルカショーに参加し、人気者となりました。

井上聡

「発信機」お役に立てたかな？

吸盤でとりつけられた発信機の模型を引っぱり、得意げに泳いでいるのはベルーガの「デューク」。

（社）海洋産業研究会が推進する、「くじら回遊追跡システムの開発研究」の一環として行われた、公開実験でのひとコマです。人工衛星を利用してクジラの回遊を長期にわたり追跡するために必要な、クジラに装着する発信機の開発を目的としたこの実験は、7月17日にマリンシアターのショープールで行われました。「デューク」は、実験のアシスタント役を十分に果たし、参加した30名をこす、プロジェクト委員と実験チームの皆さんに、今後の研究の発展につながる貴重なデータを残してくれました。

勝俣浩

新たな感動・「ひと夏の体験」

シャチとのふれあいを通して、トレーナー体験ができる「ひと夏の体験」は、毎年多くのご応募をいただき、夏の人気イベントとなっています。今年は多くの方にお楽しみいただけるように、実施回数を増やすとともに、イルカとベルーガのトレーナー体験を加えた、「フレンドリー・オルカ」、「ラブリー・ドルフィン」、「ファンタジー・ベルーガ」の3つのコースを設けるなど、内容を一新しました。合計1,631名の方が参加して、ステージでサインを出したり、水中でイルカたちとの心あたたまるスキンシップを行うなど、感動のひとときをすごしていただきました。

佐伯

「ビックリ！スコール」プレゼント

今年の夏催事の目玉として実施された「ビックリ！スコール」は、シャチがショー中に逆立ちをして、その大きな尾ビレで客席めがけて水をかけるものです。このイベントに参加した勇気ある？お客様は、スタンドに設けられた「ずぶぬれゾーン」で、客席上段までもとどく予想外の水の量に、文字通り「ビックリ！」。全身ずぶ濡れになりながらも、この暑さをふきとばすシャチからのプレゼントに大喜びでした。ご覧になっていたお客様も、水しぶきを浴びる参加者に大きな拍手で声援を送り、シャチの豪快なスコールが加わった、今夏のオーシャンスタジアムは、以前よりもまして、大きな歓声につつまれていました。

宮下

ナイトアドベンチャー

海の生きもの達の夜の生活をご覧いただきながら、園内を約１時間かけて一周する、夜の水族館探検「ナイトアドベンチャー」が、今年の夏休みに、初めての試みとして行われました。近郊の宿泊施設にお泊まりのお客様を中心に、のべ約1,000名の方々の参加がありました。ひっそりと静まりかえった館内で、活発に動きまわる夜行性の魚類やイセエビ、トドの寝姿やシャチのゆったりとした泳ぎなど、昼間では見ることのできない動物達の行動が見れたり、飼育係員によるQ＆Aをおりまぜた説明に、ひと味ちがうシーワールドを楽しんでいただきました。

岡田光